

アクセント型の聞こえのゆれと発話のゆれ (その2)

——長崎アクセントと大阪アクセント——

杉 藤 美 代 子
中 塚 裕 子
高 橋 美 絵

1. はじめに

大阪出身者中塚裕子は“ハナガタカイ”と聞けばすぐ誤りを指摘する。“これはハナガタカイでなければならない。鼻が、はハナガでもハナガでもない厳密にハナガでなければならない”。と。然し長崎出身者高橋美絵は、“ハナノタカカ(鼻が高い)、ハナノタカカ、ハナノタカカ、またハナノタカカ”(花が高い)でも多少異和感がある程度で、前者でなければならないというきびしさが無い。

数年前から計画した単語アクセントの安定とゆれを調べるため中塚(この稿では Na とよぶ)の収録した50人分の大阪及びその周辺

在住者の発話、と、高橋(Ta とよぶ)が同じ単語を同じ方法で収録した36人の長崎市及びその周辺のもの、この両方言アクセント資料に見られる“ゆれ”の相異は、上記 Na と Ta 二人のアクセント感の差が個人差でなく、安定した大阪アクセントとゆれの多い長崎アクセントとの特徴を示していることを物語る。

さて、昨年末杉藤は、この稿と同じ題名で“合成言語によるアクセントの研究”の副題をつけ、アクセントのピッチと聞こえの問題を説明した。¹⁾ 即ち、大阪アクセント〇〇型と〇〇型とが、第1拍と第2拍のピッチのわずかな平行移動によるそれぞれ下げ上げで、隣接するものであること、及び合成言語17種類の聴取テストから、

アクセント型の聞こえには個人差のあること、等を明らかにした。更に、それらが、アクセント型の個人々々による“ゆれ”及び個人の数回発話中に起る“ゆれ”とも関連すると推測されることも述べた。

その後、すでに推測はされていた“アクセントの山のずれ”²⁾の問題を、“アクセントという言語学的情報が「声立ての指令」と「アクセント指令」という2値的な入力によるものである”とする前提のもとに、³⁾大阪アクセント4種 $A\overline{OO} \rightarrow B\overline{OO} \rightarrow C\overline{OO} \rightarrow D\overline{OO} \rightarrow A\overline{OO}$ 、を文字通りアクセント指令の“アクセントの山のずれ”²⁾としてコンピューターにより合成することができた。⁴⁾⁵⁾

今回は、これには直接ふれないが、これらの問題をふまえて長崎方言という二型式アクセント型の聞こえのゆれ、発話自体のピッチの不安定の問題を述べる。即ち、(1)二型アクセントと呼ばれる長崎アクセント二拍語二種 (\overline{OO} 型と \overline{OO} 型)の個人によるアクセント型の“ゆれ”がひどく、また一個人数回発話も同様であること、その理由が、 \overline{OO} 型の中に \overline{OO} 型と聞き取られるもの多く、又、 \overline{OO} 型には \overline{OO} 型と聞きとれるものもあり、それらのピッチ曲線の隣接しあう状況が、アクセント型の安定度の高い大阪アクセントと差のあることを説明する。これが周辺に別種の二型、一型、いわゆる曖昧、東京式等、種々のアクセント型を持つ長崎アクセントの特徴の一つと言える。と同時に、(2)これは、従来“ていねいな発音”あるいは“反省型”という形で把握されることの多かったアクセント型が、自然な発話で多人数の収録を扱った場合に聴取されるアクセ

ント型とどう対応するか。という問題とも関連する。また、(3)この方法によって殊に、方言によるアクセントの安定不安定の差が明らかにできるということを説明するものである。

但し、(2)にのべた“ていねいな発話”あるいは“反省型”と、むしろさな発音との対比の問題や次に述べるような長崎方言近傍の他アクセントとの関係等は今後の問題として残す。

2. 長崎二型アクセント概略

—「九州音調の研究」による—

長崎アクセントについては、古くは1914年ポリヴァーノフの三重村調査があり、2種のアクセント型とそれらに助詞のついた型とが報告されている。⁶⁾九州アクセントに関するその後の大きな業績は1951年平山輝男によるものであり、⁷⁾全九州500余ヶ所踏査による考察がなされているのは周知のとおりである。その調査において長崎県下を中心とする(北部地方その二)音調の分布については、次の①～④までの4種に別けて説明される。(以下氏の、アクセントの意味に使われる「音調」の語を、文字通り「音調 (tone)」の意味の引用以外は「アクセント」の語に置きかえさせていただく。なお、原文通りの引用においてはそのままにする。但し、次の分類説明のしかたは原文通りではない。

① 北松浦と五島列島——(一型アクセント)

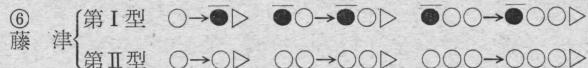
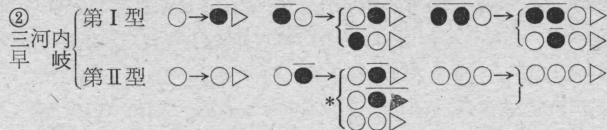
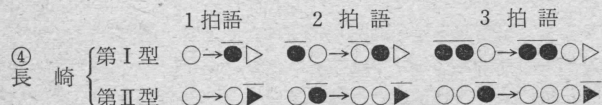
- ② ^{ミカワチ ハイキ}三河内・早岐——(二型アクセント、北の松浦式一型と、南の長崎二型に接し北浦寄りは割合曖昧アクセント)
- ③ 嵯峨アクセントと対島アクセント——(東京式一変種)
- ④ 長崎アクセント——(二型^{ソノキ}アクセント、②より広い地域、県下の主流、長崎市、西彼杵、島原半島、東彼杵郡東南大部分)
5. (その他)——アクセントの島——(狭い地域に特殊アクセントを有するもの)

⑥ 佐賀県 藤津——(二型アクセント)

これらの記述は、長崎アクセントがいかに複雑な型の分布にとり囲まれているかを説明するものであり、一方、大阪アクセントは、近畿地方の一部を除いて広く分布する近畿アクセントに属し、その所属語彙に多少の異同はあるもののその体系が一つにまとめられるものであることから両者は同じ京阪式と呼ばれるもの或意味では対照的な性格を持つことが予測される。

長崎二型アクセントは、平山によれば次の二種に分けられる。氏のA型B型をこの稿では第I型第II型と呼ぶことにする。

これらを前に掲げた②三河内・早岐及び、⑥佐賀県藤津に比べれば、次のようになるとされている。



前掲書中に②⑥のアクセントの曖昧さは随所に指摘される。例えば、②三河内・早岐にあつては、第II型二拍語は、○○アカ、垢)、助詞がつけば○○▷(アカガ)であるが、

*“但し人によっては、次のように助詞を平らに続けることもしばしばある。”(アカガ) * “更に注目すべきことは、語のみ単独に発音する時、全平でも耳障りを感じないことである。”

“全平でもやや尻上り調でも土着人は耳障りを感じない。”

一方④の長崎アクセントに関しては上記地域に比べて次のように明瞭な説明がなされている。

第I型、アカ(赤)・カサ(瘡)・カワ(川)・ハナ(鼻)→アカガ、(……よりも赤の方が……)、アカノ・アカン(赤が・赤の)、カサニ、カワモ、ハナバ(鼻を)

第II型、アカ(垢)、カサ(傘)カワ(皮)ハナ(花)→アカガ、ア

カノ、アカン、カサユ、カワモ、ハナバ

この第II型、アカ、カサ等に関しては、

“語末の音節が高い。この点は佐賀音調と異なる著しい特徴の一つである。”と。

然し、第4章で述べるように自然な発話による長崎アクセントの資料は、まことにバラエティに富むものである。

3. 資料について

3.1. 大阪アクセントの資料 (近畿アクセントの資料というべきであろうが) は、大阪市中河内・南河内・奈良県 (除く南部) を主とする。録音した地域を図3.1に示す。大阪市周辺アクセントを比較しようとした資料の一部である。大阪府と奈良県との間には生駒山が南北にのび両地の境となっている。大阪と奈良の差は今回は問題とせず、2拍語の単語別、各人発話アクセントの集計をした。

(1)インフォーマントは(イ)人数50人、(ロ)本人及び母親 (両者必ずしも同一地域ではない) が、上記地域で生れ育ったものである。(ハ)男性28人、女性22人、(ニ)職業は、商業、工業、公務員、会社員、主婦、(ホ)年齢20才台～80才台、内訳は、20才台10人、30～40才台13人、50才台11人、60～80才台16人

(2)録音材料は、2拍語、東京アクセント型分類による平板語37語、頭高39語、中高42語、計128単語である。かなと漢字を並記した原文の、主に漢字を読んでもらい、まちがったと本人が思った時

は、いつでも気楽に読み直しをしてもらっている。

3.2. 長崎のアクセントの資料

(1)インフォーマントは、(イ)人数36人、(ロ)出身地、長崎市内で生まれた育ったものを中心に次の三グループとした。

a グループ 24人 (男性4人、女性20人) 本人並びにその母親も長崎市内で生まれ育った純粋な長崎っ子

b グループ 31人 (男性6人、女性25人) 本人は長崎市内で生まれ育ったが、その母親が、諫早、島原、熊本、天草等における二型アクセント地域出身者を、aグループに加えた人数。

c グループ 36人 (男性7人、女性29人) 全員。本人が、五島、福江市、島原、天草等出身者を加えた総数。

但し、この稿では主にaグループを扱い、一型アクセント、又は他の二型アクセントとの関係は扱わない。大阪及びその周辺のアクセントとの比較では、後者が二府県にわたる地域であるにもかかわらず、純粋の「長崎市」出身者と比べてもなおかつ、長崎アクセントにゆれの多いことを示す。(ハ)性別が女性にかたよったのは、昼間の録音ゆえで、意図したものではない。(ニ)職業は大阪と同様商業、公務員、会社員等であるが、土地柄工業はなく、主婦が $\frac{1}{2}$ を占る。

等の理由が考えられるが、今の所明確なことは言えない。その二は、発話のピッチ自体が不安定で、アクセント型の聴取者側にゆれの出る例で、例えば、この50人のインフォーマント中、南河内のある名家の当主の発話がそれに当る。(この場合、乳母の出身地に関係があるかもしれないが)この理由もまだ明瞭でない。このような例は、いずれも大阪周辺では少ないが、長崎では非常に多い。

4.2. 長崎アクセント2拍語、2種類のアクセント型

第I型 $\bar{O}O$ ($O\bar{O}\triangleright$)

第II型 $O\bar{O}$ ($O\bar{O}\triangleright$)

長崎アクセントに於ける2拍語単語の種類は、東京の二種(今、平板と尾高の問題を論外におく⁸⁾)と同じ二種類であるが、助詞をつけた場合に全く異なる型となる外、2拍語それ自体の型の不安定さに特徴がある。純粋な長崎っ子(その母親も長崎生れの長崎育ち)24人の発話であるに拘らず、その24人全員が同じアクセント型に発話している単語は、第I型では、 $\bar{セ}$ ミ(蟬)と $\bar{ハ}$ ハ(母)、第II型では($\bar{O}O$ 型と聞きとれるものをも加えて)イ $\bar{ロ}$ (色)とイ $\bar{タ}$ (板)で合計4単語である。また、どちらのアクセント型に所属するか明瞭でないものもあるから、大阪アクセントの場合のように何単語中何単語というような数値が出にくい。

そこで大阪、長崎の単語数を揃えて、その総計を%であらわし、同一の型に属するもの80%以上のものを、一応安定した単語として表に示したのが、表4.2.1.である。この表は両方言のアクセントの

安定度を如実に物語ると思われる。なお、長崎アクセントの助詞をつけた場合の安定度をまとめたのが、表4.2.2.である。また、単語のアクセントと、助詞をつけた場合の発話アクセントで、第I型 $\bar{O}O$ (鼻) $\rightarrow\bar{O}\bar{O}\triangleright$ (鼻が)、第II型 $O\bar{O}$ (花) $\rightarrow\bar{O}\bar{O}\triangleright$ (花が)の通り、その組み合わせの一致しているものをまとめたのが、表4.2.3.である。但し、次のような操作を行ったものである。

即ち、第I型、第II型の単語単独、および助詞をつけた場合の合計は第I型は $\bar{O}O$ 型と $\bar{O}\bar{O}$ 型に聞きとれるもの、第II型は $O\bar{O}$ 型と $\bar{O}\bar{O}$ 型に聞きとれるもの、助詞をつけた場合、第I型は、 $\bar{O}\bar{O}\triangleright$ 、 $O\bar{O}\triangleright$ 、 $\bar{O}\bar{O}\triangleright$ 、第II型は $O\bar{O}\triangleright$ 、 $\bar{O}\bar{O}\triangleright$ 、 $\bar{O}\bar{O}\triangleright$ を許容している。

上記の資料は、大阪と長崎の場合を同様に扱って、前者50人、後者24人の、128単語を聴取し分類集計した結果である。

4.3. 16単語一人5回発話の聴取—長崎の場合

表4.3.1. は、長崎出身者31人(第3章資料に述べるbグループ—本人長崎生まれ育ち、その母親、他地域育ち5人混る)の、1単語につき各5回発話の集計である。ここに用いた16単語は、次の二種類からなる。その一は、同一音素の構成でアクセントに対立のあるもの、その二は、大阪アクセントの中で、アクセント型の発話にゆれのあるものである。

表4.2.1.

長崎方言と大阪方言、アクセントの安定度(単語)

	長崎方言	大阪方言
100%	<p>○(第I型) 鯉、母(2)</p> <p>○(第II型) 色、板(2)</p>	<p>○(A型) 足、母、明日、犬、色、岩、馬、川、紙、菊、北、髭、倉、葱、米、音、駄目、梨、餅(22)</p> <p>○(B型) 倉(1)</p> <p>○(C型) 海、肩、罪、松、舟、穴(6)</p> <p>○(D型) 姉、嬢、上、牛、岡、寛、風、皿、蝦、組、箱、水、嫁、槍、星、道(16)</p>
90%以上	<p>○(第I型) 魚、梅、皿、腰、眼、水、青、精、鯛、牡、川、音、地味(13)</p> <p>○(第II型) 亀、靴、粉(3)</p>	<p>○(A型) 蟬、家、石、杜、親、髪、草、唇、舌、炭、寿司、鉄、鷹、瀧、神、火事、雲、幸、泡(19)</p> <p>○(B型) 青、赤、秋、朝、汗、兄、雨、影、鳩、春、額、傘、蜘蛛、社(14)</p> <p>○(C型) 板、針、傘、箱、種、味噌、麻、皮、粉、父、垣(11)</p> <p>○(D型) 味、飴、椅子、魚、灰汁、いか、梅、枝、腰、里、床、鼻、陸、栴(14)</p>
80%以上	<p>○(第I型) 姉、嬢、いか、椅子、上、牛、鉄、鯉、赤、兄、幸、民、櫻、石、岩、しつ、派手、梨(18)</p> <p>○(第II型) 陸、秋、汗、針、影、箱、雲、蜘蛛、味噌、雨、足、泡、親、胸、匙、米、舌、寿司、瓜、傘、松、鮑、明日、穴、家、馬、草、しち(28)</p>	<p>○(A型) しち(1)</p> <p>○(B型) 謎(1)</p> <p>○(C型) 瓜(1)</p> <p>○(D型) (0)</p>
80%未満 揺れの ある語	灰汁、味、飴、種、磯、餅、枝、岡、風、里、鷹、床、謎、組、鼻、嫁、槍、星、道、柿、梅、朝、渦、嘘、斧、河、神、火事、牙、種、鳩、罪、春、舟、原、牡蠣、花(人名)、顎、麻、犬、岸、皮、紙、髪、菊、北、髭、靴、倉、灰、駄目、父、垣、花(55)	種、磯、精、嘘、斧、牙、原、嫁、鮑、岸、しつ、地味、派手(13)

表4.2.2.

長崎方言、アクセントの安定度(助詞をつけた場合)

100%	<p>○▷(第I型) 鉄、鯉、赤、兄、母、音、梨(7)</p> <p>○▷(第II型) 箱、家、犬、色、髪、粉、寿司、海、明日、靴、傘(11)</p>
90%以上	<p>○▷(第I型) 風、馬、蟬、蝦、皿、腰、箱、水、柿、青、石、川、地味、派手(14)</p> <p>○▷(第II型) 影(1)</p>
80%以上	<p>○▷(第I型) 味、椅子、魚、いか、梅、鷹、組、槍、星、傘、鯛、紙、牡(15)</p> <p>○▷(第II型) 朝、汗、板、瓜、肩、亀、雲、舟、味噌、鮑、麻、足、親、草、船、米、しち、舌、炭、餅、陸、秋、雨(23)</p>
80%未満 揺れの ある語	姉、飴、嫁、灰汁、粉、磯、上、牛、枝、岡、里、床、謎、鼻、嫁、道、精、渦、鯛、斧、神、蜘蛛、民、春、原、牡蠣、花(人名)、顎、岸、皮、菊、北、髭、倉、しつ、駄目、父、垣、泡、罪(40)

表4.2.3.

長崎方言、単語単独の場合と助詞をつけた場合の組み合わせによる安定度

100%	○→○▷(第I型) 鉄、鯉、赤、兄、母、音、梨、蟬、蝦、皿、腰、水、青、石、川、地味、派手、いか、梅、椅子、春、髭、鯛、岩(24)
80%以上	○→○▷(第II型) 箱、家、色、粉、寿司、明日、靴、影、汗、板、瓜、亀、雲、味噌、鮑、足、親、草、船、米、しち、舌、陸、秋、雨、針、松、穴、馬、匙(30)
80%未満 揺れの ある語	犬、髪、海、蟹、風、柿、味、魚、鷹、組、槍、星、紙、朝、肩、舟、炭、餅、火事、牙、種、鳩、花、灰汁、鮎、飴、嘘、種、上、牛、枝、岡、里、床、謎、鼻、嫁、道、精、渦、髭、傘、神、蜘蛛、民、春、原、牡蠣、花(人名)、顎、岸、皮、菊、北、髭、倉、しつ、駄目、父、垣(61)

(その一) 鼻 花、飴 雨、橋 端 箸

長崎 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ 、 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ 、 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ $\bar{O}O$

大阪 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ 、 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ 、 $\bar{O}O$ $\bar{O}O$ $\bar{O}O$

(その二) 岸、牡、嘘、粋、質、膝、原、派手、地味

(これらの録音順序はランダム配列によった。)

表4.3.1.の集計から長崎アクセントを推定しようとするれば $\bar{O}O$ 型と $\bar{O}O$ 型だけで判断しにくい場合が多い、 $\bar{O}O$ と $\bar{O}O$ 又は $\bar{O}O$ と $\bar{O}O$ の合計が、60%を越すものは太字で示した。太字の数が上部の分類第I型にあるか第II型にあるかでアクセント型が判断できる。助詞をつけた場合(右側)とも対応している。然し太字のないものも“箸、原”は、第II型の側が50%を超えるが、“嘘”はどちらとも判断しかねる。

次に前述の発話者H(ゆれが比較的少ない人)の16単語各5回ずつの発話を、23人(Ta、Na、Suの外大阪周辺出身者20名)で聴取した結果が、表4.3.2.である。

$\bar{O}O$ 型と $\bar{O}O$ 型に聞かれたものを、第I型とし、 $\bar{O}O$ 型と $\bar{O}O$ に聞かれたものを第II型として、それぞれの語のアクセントを一応推定して*印をつけた。第I型は $\bar{O}O$ のはずであるが、この型と聞かれるものは少く、 $\bar{O}O$ 型と聞かれるものが誠に多いことがわかる。一方、第II型は $\bar{O}O$ と聞くものだけでその型と判断できる。この23人中に加わっているTaとNaとSuの聴取結果を右側に取出して比較した。長崎Taの聴取(太字)は他に比べてここでも $\bar{O}O$ 型が少ない(表4.3.3も同様である。)Ta、Na、Saの3人は、コンピュ

表4.3.1.

長崎出身者31人、1単語につき各5回発話の集計

単語	助詞をつけない場合(%)		助詞をつけた場合(%)				
	第I型	第II型	第I型	第II型	その他		
	$\bar{O}O$ $\bar{O}O$	$\bar{O}O$ $\bar{O}O$	$\bar{O}O$ ▷ $\bar{O}O$ ▷	$\bar{O}O$ ▷ $\bar{O}O$ ▷	$\bar{O}O$ ▷ $\bar{O}O$ ▷		
鼻	69 (2)	23 (6)	44 (32)	8 (13)	1		
花	28 (1)	53 (15)	13 (19)	10 (55)	1		
飴	44 (6)	36 (12)	35 (18)	6 (35)	3		
雨	19 (1)	63 (15)	15 (14)	11 (55)	2		
橋	58 (7)	24 (7)	52 (15)	3 (24)	1		
端	81 (4)	10 (3)	51 (22)	4 (18)	3		
箸	40 (1)	43 (13)	24 (16)	8 (47)	2		
岸	27 (4)	52 (15)	21 (12)	10 (54)	0		
牡	79 (5)	7 (6)	67 (18)	3 (7)	3		
嘘	31 (19)	40 (10)	19 (18)	4 (54)	2		
粋	54 (15)	21 (5)	52 (23)	1 (13)	4		
質	59 (5)	30 (3)	50 (16)	4 (26)	1		
膝	83 (4)	8 (3)	62 (25)	1 (5)	3		
原	41 (4)	44 (10)	34 (23)	6 (35)	1		
派手	74 (7)	15 (3)	63 (27)	0 (8)	1		
地味	90 (3)	5 (1)	67 (24)	2 (1)	4		

表4.3.2 われの少ない

長崎発話者Hの一単語5回発話の集計

(聴取者: 23人・長崎・東京・大阪21人)

単語	ア・型		ア・型		ア・型		ア・型	
	聴取者23人(%)		聴取者		聴取者		聴取者	
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
鼻	51 *	(12)	34	(3)	長崎 Ta	4	1	
					大阪 Na	2	3	
					東京 Su	3	1	1
花	4	(3)	70 *	(23)	Ta	1	4	
					Na	2	3	
					Su	2	4	1
船	43 *	(41)	11	(5)	Ta	5		
					Na	3	2	
					Su	1	2	1
雨	10	(5)	83 *	(2)	Ta	5		
					Na	1	4	
					Su	2	5	
橋	13 *	(49)	30	(8)	Ta	3	2	
					Na	1	4	
					Su	5	5	
端	30 *	(27)	25	(18)	Ta	5		
					Na	1	1	3
					Su	4	1	
箸	12	(3)	76 *	(9)	Ta	5		
					Na	5		
					Su	5		
岸	8	(3)	87 *	(2)	Ta	1	4	
					Na	5		
					Su	5		
社	9 *	(78)	11	(2)	Ta	5		
					Na	5		
					Su	5		
嘘	2	(8)	79 *	(11)	Ta	1	4	
					Na	5		
					Su	5		
粋	13 *	(64)	20	(3)	Ta	1	4	
					Na	1	2	2
					Su	4	1	
質	10	(6)	80 *	(4)	Ta	5		
					Na	5		
					Su	4	1	
膝	48 *	(22)	25	(5)	Ta	4	1	
					Na	2	3	
					Su	4	1	
原	9	(2)	80 *	(9)	Ta	1	4	
					Na	4	1	
					Su	5		
派手	13 *	(50)	27	(10)	Ta	4	1	
					Na	2	3	
					Su	3	1	1
地味	78 *	(9)	12	(1)	Ta	4	1	
					Na	5		
					Su	4	1	

表4.3.3 われの多い

長崎発話者Mの一単語5回発話の集計

(聴取者: 23人・長崎・東京・大阪21人)

単語	ア・型		ア・型		ア・型		ア・型	
	聴取者23人(%)		聴取者		聴取者		聴取者	
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
鼻	29	(14)	26	(31)	長崎 Ta	5		
					大阪 Na	1	3	1
					東京 Su	3		2
花	24	(7)	24 *	(45)	Ta	5		
					Na	1	2	2
					Su	1	1	2
船	27	(16)	34	(23)	Ta	3		1
					Na	4	1	1
					Su	1	2	1
雨	18	(19)	31 *	(32)	Ta	1	4	
					Na	2	1	2
					Su	1	2	2
橋	15	(5)	25 *	(55)	Ta	1	1	3
					Na	1		4
					Su	5		5
端	24	(4)	24 *	(48)	Ta	4		1
					Na		1	4
					Su	2	1	2
箸	22	(3)	22 *	(53)	Ta	1		4
					Na	2		3
					Su		1	4
岸	9	(6)	34 *	(51)	Ta	1	1	2
					Na		1	4
					Su	1	2	2
社	10	(5)	29 *	(56)	Ta	2	3	3
					Na			5
					Su		1	4
嘘	15	(20)	50 *	(15)	Ta	3	1	1
					Na	1	3	1
					Su	2	3	1
粋	11	(36)	22	(31)	Ta	3	1	1
					Na	2	1	2
					Su	4		1
質	20	(3)	41 *	(36)	Ta	3	1	1
					Na	1	1	3
					Su	5	4	1
膝	26	(4)	25 *	(45)	Ta	5		
					Na	1	2	2
					Su		3	2
原	27	(11)	29 *	(33)	Ta	4		1
					Na	1	2	2
					Su	1	2	1
派手	17	(13)	31 *	(39)	Ta	5		
					Na	1		4
					Su	3	1	1
地味	27	(16)	25	(32)	Ta	5		
					Na		3	1
					Su	3	1	1

ーターの合成言語によるアクセント判断の聴取実験では、26人中聴取判断の境界¹⁾が一番近い者である。それゆえ、この差は方言差によるものかとも考えられるが、この点はまだ確定的なことが言えない。

表4.3.3.はアクセントにゆれの多い発話者である。大正7年生まれ女性、長崎市生まれ育っているが、幼時死別した母親が佐賀市育ち、本人は、そこへ13才～17才まで疎開した。発話者Hのものと同様の方法で*印をつけると殆んど第II型に片寄ってしまう。この場合はむしろ〇〇型と聞こえるものが、第I型にも属する可能性がある。このように聴取結果のあいまいなものは、大阪発話者中には皆無である。

この聴取結果を大阪方言の場合と対比したものを次に示す。

4.4. 大阪との比較

表4.4.1.は、先に述べた長崎発話者MとHの16単語各5回発話の聴取と同様の方法で大阪発話者TとKのアクセント型聴取をした結果を比べたものである。聴取者は、前と同じ長崎のTa、大阪のNa、東京出身のSuの外に、前に述べた聴取判断がこの3名に比較的近いもの10名を選んでその聴取結果を表にしたものである。

表4.4.4.の中で左から聴取者Taの〇〇型の下に5の数字のあるのは大阪T発話の“鼻”は5回とも〇〇型にTaは聴取したことを示し、その下太字の4、その左方〇〇型の下太字1は、大阪Kの発話を5回のうち1回は〇〇型と聞き他の4回は〇〇型に聞いたこ

とを示す。また、始めに示した5の数字の右の5、(長崎)〇〇型の下にあるものは、(長崎)発話者(M)の“鼻”の発話を5回とも〇〇型に聞きとったことを示し、その下太字の4及び〇〇型の下にある太字の1は、聴取者Taが、長崎の発話者(H)の“鼻”の発話を4回は〇〇型に1回は〇〇型に聞いたことを示す。5以外の数字は太字で示し、発話アクセント型のゆれを見易いようにした。長崎アクセントのゆれの多いことが明瞭になる。聴取者によって聞き取りに差のあることは、この場合、発話ピッチの不安定と関係がある。右側は、聴取者10人の聴取結果を、大阪、長崎それぞれ別に%で示したもので、長崎(M)は不安定、(H)は比較的安定している者であるが、大阪二者と比較にならないほど聴取にゆれのあることが明らかである。なお大阪Tは安定、Kは比較的安定発話者である。

4.5. ピッチ曲線による観察

聴取による長崎アクセントの不安定さの検討の裏づけとして音調動態の測定をした。それらを大阪アクセントと重ね、また東京アクセントとも重ね合わせた。〇〇型が、〇〇型と同じように発話される場合は東京アクセント話者にもある。長崎アクセントの問題点は〇〇型の第1拍と第2拍のピッチ差が少い点である。

前述長崎発話者Hの“橋”と“箸”の各5回発話を重ねたものを図4.5.1.に示す。これは、各単語の持続時間の平均値を出し、持続時間を正規化してピッチを重ねたものである。点線の部分は子音

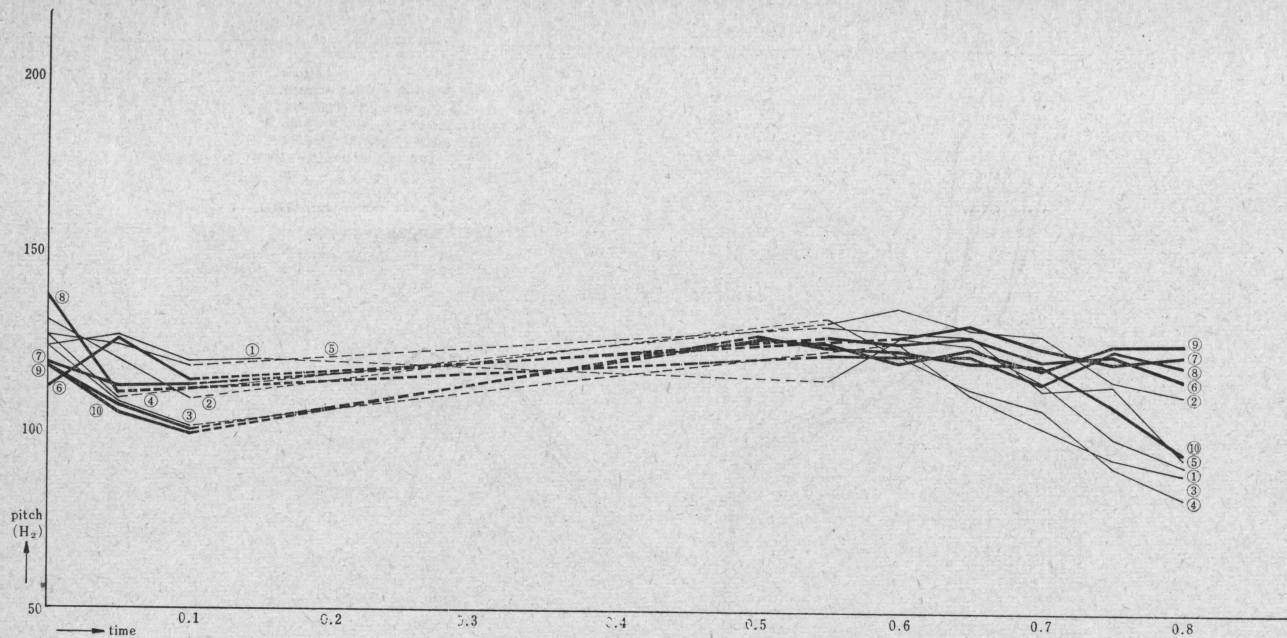
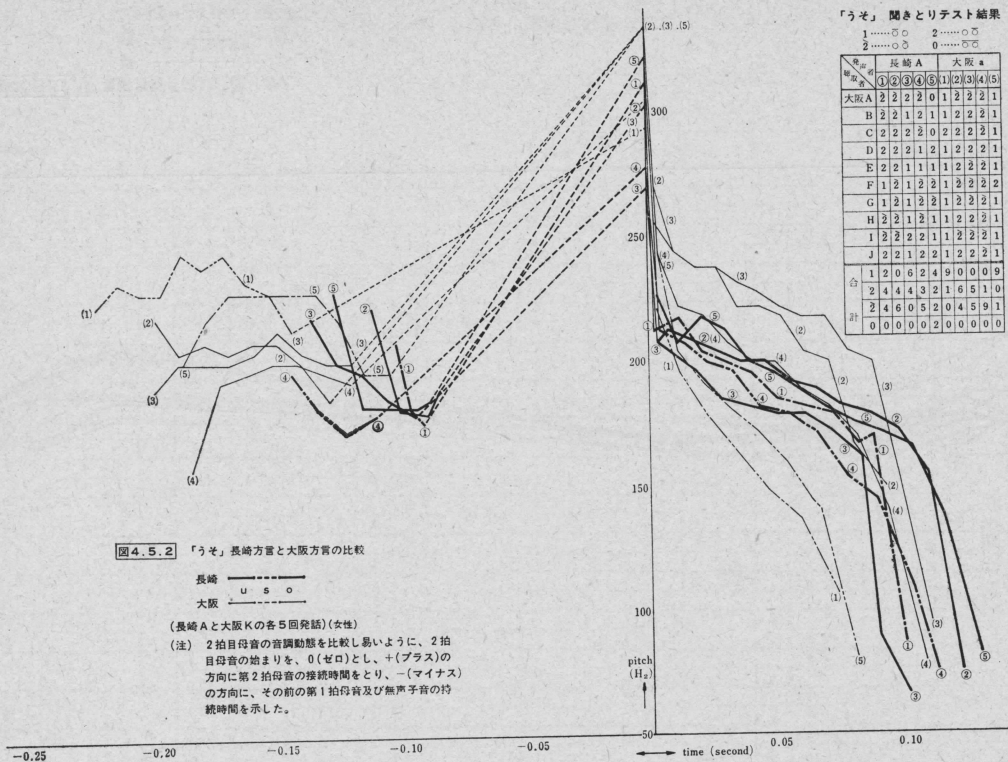
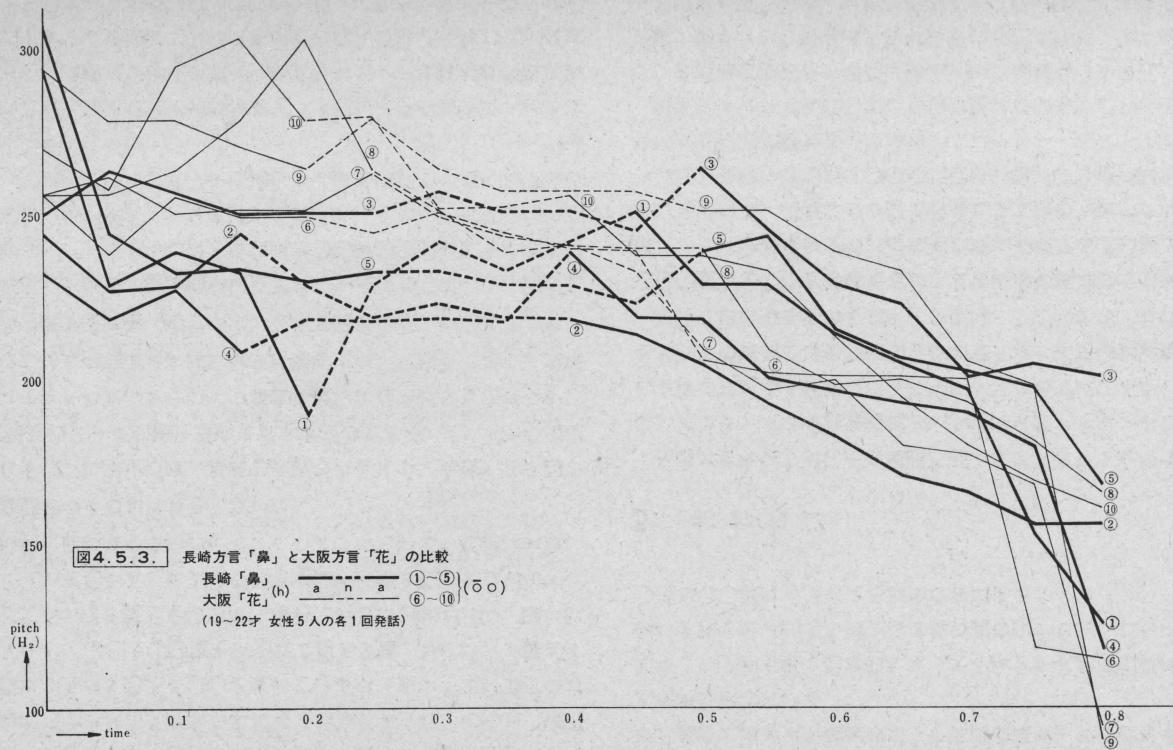


図4.5.1. 長崎方言「橋」と「箸」(男性)
 橋 (h) a s i ①~⑤
 箸 (h) a s i ⑥~⑩
 (発話者Hによる各5回発話)





の部分である。“箸” \overline{OO} の5回発話を太線で、“橋” OO のそれを細線で示す。前出、表4.4.4.に見る聴取結果では、このH“箸”は聴取者3人が5回とも \overline{OO} と聞いているが(表中*印)“橋”の方は、Taが、 \overline{OO} と OO 型それぞれ3箇所と2箇所、Naが、1箇所と4箇所そしてSuは5箇所とも OO 型に聴いている。(表中☆印)、図4.5.1.のピッチを見ると、第1拍の母音が低すぎ第2拍が下り切らず、第1拍が十分に高くないため、このようにあいまいな例は大阪、東京発話者のものには見られない。

図4.5.2.に示すのは、長崎と大阪のAとKの(女性)各5回の“嘘”発話のピッチ曲線をそのまま示すものである。(ピッチの測定はペンオシロの波形を一つずつ測定算出した。)両者ともゆれの多い発話で、10人の聴取者の聴取結果は図右上に示す通りである。大阪発話者の第1回発話(1)で示す)と第5回目発話、が頭高アクセント(第1拍が高く、第2拍が低く下降——破線で示し、(1)、(5)の記入がある——)であるに対し他三回は OO か \overline{OO} 型のように第1拍低く第2拍がやや高く、又下降が急でない。それに比べて長崎アクセント太線の方は、各ピッチ曲線がよく似て区別のつきにくいことを示している。

次に大阪と長崎のピッチの相違が、原因がどうか確かめるため次のことを、試みた。即ち、長崎発話者aグループ24人のうち、19才～22才までの女性は5人であるがその5人の OO (鼻)と大阪女性19才～22才、5人の \overline{OO} (花)——同一アクセント——のピッチ

を測定して持続時間を正規化し重ねて見た。結果が図4.5.3.である。長崎太線と大阪細線のピッチは両頭高ピッチの差をまことにあざやかに示している。

即ち、いずれも第2拍は似たピッチを示すが、第1拍目は長崎の方がいずれも低い。第1拍と第2拍の差の少いこと、これが長崎の \overline{OO} 型が OO 型にも聞こえる理由なのである。

5. おわりに

長崎アクセントが、その周囲に種々なアクセントを持つ地域だけに、アクセントのゆれと安定という点で大阪アクセントと異質のものを持つであろう期待を持って手がけたことではあるが、聴取実験とピッチの実測で、それが明らかな差となってあらわれた。

長崎二拍語の二つのアクセント型は、型だけからすれば東京と同じ \overline{OO} 型と OO 型ともいえるが、この両者の根本的なちがいは、長崎アクセントの場合その二つの型の間に介在する \overline{OO} 型が聴取されることである。現実はこの型を別種として持つ大阪アクセントと比べれば、長崎の \overline{OO} 型は OO 型に近く、第1、2拍のピッチ差が、少いことは既に見た通りである。

大阪アクセントA \overline{OO} 型、B \overline{OO} 型、C \overline{OO} 型、D \overline{OO} 型でいえば、B型はC型と近い関係にある。⁴⁾ そのB型がA型と同種である長崎アクセントの場合は、A～B～Cへとゆれのパターンをすでに持っているということになる。その上、C型にD型が混在するから、

型が不安定になるのは当然である。

アクセントのゆれ更に変化のパタンに関する考察等もこうした実験資料の積重ねを必要とすると思われる。この稿で問題にした聴取に於ける個人差と方言差の問題も、なお多くの聴取実験を必要とする。これを糸口としてなお検討して行くつもりである。“われわれは……(中略)……言語動態の研究をしているのだから、その混沌や不条理や破綻の中にこそ変化の芽・痕跡があるのではないかと考えて、取り上げて見るのである。”⁸⁾の角度は音声学の側からも言えることであり、泉井先生の“割りきれない剰余”が“未発のもの”の予弱であることもおおい。¹⁰⁾ につながるものであろうと思われる。

終りに平山輝男氏の踏査に敬意を、ポリヴァーノフの貴重な原文をお貸し下さった村山七郎氏、吉町義雄氏、並びにアクセントの動揺と安定に関しさまざまのご提案をいただいた徳川宗賢氏に感謝の意を表したい。

- 1) 杉藤美代子、アクセント型の聞こえのゆれと発話のゆれ——合成言語によるアクセントの研究、大阪樟蔭女子大学論集 11、1973.
- 2) 佐久間鼎、日本音声学、(1929)、1963、p. 612
- 3) 藤崎博也、須藤寛、日本語単語アクセントの基本周波数パタンとその生成機構のモデル、日本音響学会誌27、1971.
- 4) 藤崎博也・三井康義・杉藤美代子、東京及び近畿方言の2拍単語アクセントの分析・合成と知覚、日本音響学会音声研究

委員会資料 S73—51、1974—03

- 5) 藤崎・三井・杉藤、近畿方言の2拍単語アクセントの分析・合成及び知覚、日本音響学会講演論文集、1974、6月(678)
- 6) ポリヴァーノフ、守屋長訳、京都及び土佐に於けるアクセント現象、方言2の8、1932、ポリヴァーノフ、吉町義雄訳、日本方言学資料(長崎県三重村方言転写)、音声の研究6、1937.
- 7) 平山輝男、九州方言音調の研究、1951.
- 8) 杉藤美代子、動態測定による東京2拍語尾高と平板アクセント考、音声学会報129、1968
- 9) 徳川宗賢、方言地理学と比較方言学、学習院大学国語国文学会誌17号、1974.
- 10) 泉井久之助、言語の世界、1970.